

# 「宗教と文明」シンポから

二十一世紀に向けて宗教はどんな役割を果たさうか。国際日本文化研究センター(梅原猛)所長は文部省重点領域研究「文明と環境」の一環としてこのほど公開シンポジウム「宗教と文明」を開いたが、「神々が共存している」日本の宗教風土への関心が集まった。

破壊を齎してきた現象をどう克服できるか。日本の役割をめぐっては「世界は東西対立から南北対立の時代になり、イスラーム教が南のイデオロギーになるだろう。きめ細かな理解をすべきだ」(平山健太郎・NHK解説委員)、「高度技術社会を踏まえ、新しい文明の原理を」(安田善彦・同センター助教授)、「地球環境の問題で未来を大事にするのを宗教の課題にし、各宗教の対話の場を」(榊山絃一・東大教授)などの意見が相次いだ。

青木保・大阪大教授は「先端技術の中に『マジ』理論」というのがあろうか(マジ)といまじくである日本の宗教的風土をうまく理論化して世界に説明すべきなの」と話していたが、日本の「マジ」な宗教風土は果たして世界に発信できるだろうか。日本の宗教を肯定的に見る流れが生まれつつあるのかもしれないと、筆者は感じているシンポジウムだった。

宗教や民族のヒコイズムによる紛争が世界各地で激化しているが、その解決に「利害を越える超越的な価値と理性が必要だとすれば、中国の『天』やインドの『不殺生』『非暴力』など東洋的な価値を注入することはできないか」と山折哲雄・同センター教授は基調講演で指摘した。

さらに氏は「万物に生命を認めるアニミズム(精霊信仰)は原始宗教で、多神教からより普遍的な一神教に進化した」という宗教発展段階説があるが、その見方の逆転が求められている。今後、自然や宇宙で共存する生命信仰が浮上して「共存」と問題提起。日本の宗教については「発信型ではなく受信型だった。日本の近代化の成功は宗教が世俗化して政治・経済システムを固守しなかったためだ。宗教が政治と緊張をもたず、神道、仏教、儒教などの理念主張を共存させ、統合させる日本は二十一世紀において積極的な意味がある」と強調した。

## 神々共存の日本、世界へ発信できるか

神仏が混合し、原理・原則にとわらない日本人の宗教意識。一方で、自然を崇拜しながら、環境



京都市内で開かれた公開シンポジウム「宗教と文明」

京都市内で開かれた公開シンポジウム「宗教と文明」